

### 馬場書記生の日本人救出作戦

鷺谷精一がニューオルリンズからキューバ経由でベラクルースに到着したのは1913年10月10日であった。メキシコ市で取材に当たった鷺谷は失望した。郵便による投稿に優に三週間かかることであった。郵便は船でベラクルースからニューヨークへ、そこから鉄道で運ばれた。更に、メキシコ市では厳しい報道管制が敷かれていて、首都で入手する情報は英字新聞が報道する内容と違うことに気付き、鷺谷はウエルタ政府の報道に疑問を持つようになっていた。11月19日、鷺谷が電報で発信した「ウエルタ政権崩壊の兆し」という小さな記事が日米新聞に掲載された。これがウエルタ政権の将来を危惧する最初の報道であった。次いで鷺谷は12月4日、ウエルタが決して失ってはならないと厳命していたチワワ州都が憲政軍の手に落ちたことを報じた。こうして加州日系人社会は混沌としたメキシコ情勢の行方と、熱烈な声援を送ってきたウエルタ政権の将来に不安を感じながら、新年を迎えることになった。<sup>49</sup>

シカゴ領事館在勤、馬場称徳書記生がエルパソに到着したのは1914年1月6日、ビヤがチワワ知事を辞任する前日であった。淀川正樹は馬場称徳が口述した回顧談を「メキシコ北部の日本移住者救出作業」として「メキシコ移住史」で発表した。

当時メキシコ駐留日本公使は安達峯一郎、駐米大使は珍田捨巳であった。チワワ、ソノラおよびコアウイラの北墨三州はメキシコ中央部から完全に孤立するに至ったので、同地方在留日本人の消息が一切不明となり、その生命の安否が気遣われていた。よって日本政府はメキシコ公使館から館員を派遣することは困難であったので、在米公使館から適当な館員を米墨国境地帯に派遣し、同地方在留日本人の保護救出その他一般情報の蒐集等に当たらせることとした。その結果選ばれたのが馬場であった。彼は東京外国語学校スペイン語科出身、外務省に入り、まずリオの公使館に二三年勤務し、ついでシカゴへ転勤した。馬場が出張を命ぜられたのは、日本が承認していない、従って日本との外交関係の全然無い反政府軍側であり、当初から彼の立場は極めてデリケートで、在留日本人の保護と救出は難事業であった。<sup>50</sup>

アメリカのウイルソン大統領は民选的に選出されたマデロ大統領をクーデターで転覆させたウエルタ政権を毛嫌いして反対したが、イギリス、スペインを始め、南米諸国に倣って、日本政府は早い段階でウエルタ支持を表明していた。ビヤがスペイン人を追放したことで、日本人も何れはそうなることを警戒していた時期であった。<sup>51</sup>

彼はエルパソを基地としてメキシコ側に随時出入りし、在留日本人と連絡を取り、その状況を調べると共に、保護救出作業を行った。日本人の事情を調べ、必要の場合には保護を講ずると言うことになれば、在留地メキシコ官憲の了解と協力を求めることが先決問題であるにもかかわらず、この官憲は日本には寧ろ反対的な反政府軍であったので、彼は任務の遂行上極めて困難な立場にあった。しかも政府軍との交渉の際の心得として、メキシ

コ首都にいた安達公使が彼に下した訓令は次のような趣旨であった。「貴官は反軍の首領ピヤに面会し、日本人の保護を依頼される場合には、貴官が政府を代表する官吏として交渉することは、道理上不当であるばかりではなく、徒に、その権力を認めることになり、益々その狂暴を逞しくさせる結果となるから、厳にこれを避けねばならない。就いては貴官は日本政府の官吏たる資格を離れ、人道的見地に基づいて交渉を行われ、如何なる場合に於いても日本政府に累を及ぼすことのないよう注意されたい。更にメキシコ国民が日本や日本人に対し好意を有することは、官反両軍を通しての一般的傾向であり、反軍のピヤ及びその部下と雖も例外ではあるまい。万一彼らが日本人に徒に危害を加えるようなことがあれば、惹いては日本に於ける彼等の信用を失墜することともなり、結局彼ら自身のため不利となるべきにつき、貴官はチワワ市滞在中適当な方法をもって、ピヤ軍側にこの道理を理解させるよう努力せられたい」<sup>52</sup>

馬場は対岸のフアレス市に在る日本人会と連絡を取り、調べたところ、戦争勃発後フアレス市に避難してきている日本人は百五十名ばかりで、その大部分は着の身着のまま、仕事口はないし、毎日の糊口にも窮している状態であった。彼らに衣食の道を見つけてやるのが急務であったが、更に緊急なことはピヤ軍によって捕らえられている官軍即ちウエルタ軍捕虜の中には、数名の日本人も加わっていたのでこれ等のものの生命を保護することであった。当時メキシコに渡航していた多数の日本人は、数年前には日露戦争に参加した独身の勇士が多数を占めていて、メキシコ人は日本人の武勇を高く評価していた時代であるので、不景気が襲来し、職がなくなると一時的ではあるが、軍隊に参加する者が多数あった。知能的にも日本人兵士は優れていたもので、後日自称他称ジェネラルと称せらるる者も数名あった。あの頃軍人としての日本人の評判はたいした者で、官軍側からも、反軍側からも日本人は奪い合いの状態であった。なにぶんにもロシアと云う大国を相手にして、戦争に勝った国民であるから、その武勇が高く評価されたのは当然である。又国際関係から云って、当時日米関係は余り良くない時代で、アメリカは日本人の入国を禁止し且つ在米日本人に対しても侮辱的な取り扱いを与えていた時代である。同時メキシコとアメリカは1845年の米墨戦争の結果、アメリカがメキシコの国土の過半を奪って以来、メキシコ国民は強い反米感情を抱いていたので、自然日本人に対しては、特別な親近感をもっていた。こんな訳で、日本人は革命の起こる度毎に、官反両軍の双方から引っ張られ、ある場合には無理やりに馬に載せられ、前線に駆り立てられたこともあると言う。

日本の公使館としては、在留日本人は飽く迄も中立的態度を採り、何れの軍にも加担しないように指示したのは当然であるけれども、広大なメキシコの全土に散在している在留邦人のことで、日本政府の方針を各自に徹底させることは困難であったし、又生活の方便として、軍隊に加わる外途なき者を阻止することは不可能でもあった。<sup>53</sup>

馬場は日本人捕虜の救命については、一刻の猶予が出来ず緊急の手段を講ぜねばならなかった。日本人会長や有志の者に相談しても誰一人良案を持っている者はいない。この儘

放置しておいては、他のメキシコ人捕虜同様、銃殺の刑に処せられるのは必定である。安達公使からの訓令の趣旨は含み乍らも、意を決してビヤ將軍に直接面会することにした。彼の本拠地チワワ市で、先ず彼の秘書に取次ぎ方を申し出た。然し彼は「信任状を持った日本の領事として、自分に面会を求めるものならば、これに応じても良いが、さもなければ辞退する」と言って先ず拒絶した。然し資格は個人としてであるけれども、君等のアミゴであり、君等の革命の成功を祝福する者である旨を秘書より取次がせたところ、案外簡単に面会してくれた。ビヤ將軍は、後日その残虐行為により、米国民を震撼させた程であるけれども、会って見ると案外物分りのよい人物で、私の申し出を受諾し、日本人捕虜の釈放を約束してくれた。又彼の占領地域内交通の安全のために、自署の通交証を彼のために発行した。<sup>54</sup>

反政府軍の占領している地域に派遣された当初から、彼の立場は極めて難しいものであった。先の馬場に対するメキシコ駐留の安達公使の訓令は極めてはっきりとしたもので、馬場はビヤ將軍との交渉に当たっては、自分が日本政府の官吏であると云うことさえも、告げてはならなかった。その理由を馬場自身は充分理解していた。日本政府がウエルタ政府をメキシコの正当な政権として承認している限り、その裏面で反政府軍と交渉することは、道義に反する行為である。然し現実の問題として、反軍の治下におかれている九百数十名の日本人の保護と、既に捕虜となっていて、明日にでも銃殺されんとしている十数名の同胞を助命せんがためには、いい加減なごまかしでは駄目であった。ビヤ將軍は馬場に対し、身分を明らかにすることを強く要求した。彼も訓令は訓令として、応急の場合の便法として、ある程度柔軟な態度を採らざるを得なかった。それがため在留民保護救出の目的は達することは出来た。然し反面、反政府軍側が、日本の領事が反軍首領に正式面会に来たなどと、自分に都合のよいように新聞に書き立て、宣伝の道具に使うことを防ぐことは出来なかった。このことは首府の新聞にも直ちに転載されたらしく、又面白くなかったのは、丁度その頃戦艦出雲の士官候補生数名が、政府軍側の許可を得て戦線の視察に来た由で、彼等は首府に帰って、安達公使に日本の馬場という領事がビヤと交渉をしていると言うことを誇大に告げた。これ等の関係で馬場は安達公使から、強い意味の叱責の電報を受け取った。これについて馬場は「今更自分の行為を弁明しようとする気は毛頭ないが、人は道理と現実との間に板挟みにされることもあるもので、その一例としてこのことを話しておき度い」と語った。<sup>55</sup>

馬場称徳書記生の報告によると、1914年1月当時フアレス市には、前年マデラ方面から避難して来た者が約四十名、チワワ市から十五名、合計五十五名の日本人避難民がいた。馬場が各方面から来た者の話を総合し、チワワ市に百名、マデラ方面に五十名内外の日本人が残留して居た模様。在留民の多数は日本から渡航してきて数年を経たに過ぎず、未だ無資力の労働者が多数を占め、婦女子諸共糊口に窮すると言う例は余りなかった。チ

ワワ市やマデラ方面の残留者について調査した処によると、彼等の多数は無資力のため失職したけれども、他地方に避難するのに必要な旅費さえも有せず、止むを得ず残留している状態であった。然し日本人にたいする官反両軍の態度や一般市民間の空気は、治安が乱れたからと云って、別に悪化した訳ではなく、残留者は特に身の危険を感じると云うことはなかった。然し一度ピヤ軍に占領されたチワワ市が再びウエルタの政府軍に奪回されるような事態が生ずると、市民生活は大きな混乱に陥り、在留日本人の生命も危険に陥るかもしれないと言うような状態であった。56

馬場書記生はエルパソに滞在すること数日にして、チワワ行き列車の復旧を見たので、1月14日からチワワに赴き、一週間余り同地に滞在し、在留日本人と接触して、具にその状態を取調べた。そのときの報告によると、チワワ残留邦人の実数は百三十八名であった。又ピヤ軍の兵士と称する不逞の徒が、しばしば日本人経営の食料品販売商店等に現れ、金品の強奪を行った模様で、後の成り行きにつき大きな不安の念に駆られていたと言う。馬場書記生は同市滞在中、英国領事や憲政軍の有力者数人を尋ね、一般の情勢や日本人の立場等につき意見を求めた処、何れも異口同音に日本人の安全を強調した由である。多くのメキシコ人は『日本人はメキシコ国民の最も信頼し親近感を有している外国人であるから、政府軍も憲政軍も日本人に対し、暴行を加えるようなことは想像できない。地方新聞が不利な記事を掲げていても、それは恐らく何らかの誤報であろう。』と言うことに各方面の意見は一致していた趣である。57

馬場称徳は出張中、ピヤ軍による捕虜の処刑の場面に二回ほど立ち会う機会があった。数十人の捕虜を原野に一行に並べ、目隠しもせず、至近距離からの一斉射撃で銃殺していた。怨みも憎しみもあり得ない同胞間で、あんな残酷な処刑がよくもできるものかな、と考えさせられた、と語っている。同じ頃日本人兵隊の三人組が、遭難したと言う事を耳にした馬場は、次のように伝えている。「ピヤ軍がウエルタ軍の一部隊二百数十名を捕虜にして、チワワからフアレスの方に向かって護送中であつたが、途中捕虜の一部が脱走を企てたので、護送の任にあたっていた士官は事面倒と思ったのか、記者がトンネル通過中、突然停車を命じ、トンネルの出入り口には機関銃を据付けて脱走兵に備え、捕虜を満載している列車に火を放ちて焼き払ってしまった。この時二百数十名の捕虜は全員トンネルの中で蒸し焼きにされてしまった。この捕虜の中には日本人で畑、藤田及び某と言う三人の日本人もいたと言う話であつたので、ピヤ軍に協力していた一日本人に頼んで調べて貰ったら、黒焼きの死骸の中から日本製の懐中時計が発見されたので、恐らく日本人も遭難したに違ひなからうと言うことが判った。」58

この事件は馬場がチワワにいた1914年2月4日、マデラの町にあるエル・クンブレと呼ばれるトンネルで発生した。このチワワ史上最も残酷な列車襲撃事件の場所は、当時ピヤがいた州都チワワの西方およそ三百キロ、ソノラ州境に近い山間の町であつた。マデラの郷土史によると、列車がトンネルの中で燃える事でトンネルの壁が崩れ、瓦礫に埋ま

ったとしている。襲われたのは普通の客車で、被害者が捕虜であったとの記述はなく、死者の数は四十数名であった。<sup>59</sup> 一方フリードリッヒ・カッツは、火を放った客車がトンネルに入ってから、その入り口と出口をダイナマイトで破壊して、蒸し焼きにし、死者は70余名で、大部分は民間人であったとしている。<sup>60</sup>

動乱の最中、パンチョ・ビヤがやらかした残虐行為として馬場の耳に入ったものと思われるが、この辺り一帯を支配していたのはオロスコ軍のジェネラル・マキシモ・カスティヨであったため、彼が事件の首謀者とされた。カスティヨは農地改革を理想に掲げ、マデロ革命初期の段階から革命に加わった。しかし、マデロが農地改革に手を付けなかったため、不満をつのらせたカスティヨはオロスコの反乱軍に加わった。カスティヨとビヤの関係は複雑で、カスティヨはある面ではビヤを賞賛しながらも、意見の食い違いがあった。カスティヨはテラサス一族の農地を直ちに分配することを主張したのにたいし、ビヤは革命に勝利するまで、軍資金を絞るために温存させた。このクンブレ・トンネルの残虐行為のためカスティヨの人気は凋落し、彼はアメリカに逃れたが捕らわれて投獄された。カスティヨは最後まで無実を主張し続けた。その後、歴史家の研究が進み、真犯人はマヌエル・グティエレスという山賊とその一味であったことが分かっている。<sup>61</sup> 日本人三人は不幸にしてこの列車に乗っていたのであろう。

馬場書記生はその後、粉骨砕身し百数十名の失業した日本人を、バハ・カリフォルニア州のインペリアル・ヴァレーへ集団転居させ、綿花栽培の仕事を世話した。ビヤがウエルタ軍を追って南下し、コアウイラ州のパラウ炭田地帯が戦闘の中心地となった時にもビヤとの交渉が繰り返された。そして4月1日、馬場書記生は一旦シカゴに戻った。<sup>62</sup>

49. 日米新聞、Dec. 1913

50. 日本人メキシコ移住史編纂委員会「日本人メキシコ移住史」、1971、P 126

51. Ibid. P136

52. Ibid P137

53. Ibid. P137

54. Ibid. P138

55. Ibid. P140

56. Ibid. P127

57. Ibid. P127

58. Ibid. P140

59. Madela, Chihuahua, [www.angelfire.com](http://www.angelfire.com), P-2

60. Friedrich Katz, “Maximo Castillo y La Revolución en Chihuahua”, Universidad Autonoma de Ciudad Juarez, 2004, P1

61. Madela, Chihuahua, [www.angelfire.com](http://www.angelfire.com) P2

62. 日本人メキシコ移住史編纂委員会「日本人メキシコ移住史」、1971、P 129